

# ◎ 受贈記念小企画展「今井兼次 不死鳥のモザイク」

～「糸車の幻想」再現制作と断片から見えるもの～

多治見市モザイクタイルミュージアム 村山 閑



受贈記念小企画展  
**今井兼次 不死鳥のモザイク**  
細部に宿る、造形の魂

会期 令和元年9月14日(土)～令和2年1月13日(月・祝)  
拝観時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分)

会場 多治見市モザイクタイルミュージアム 3F ギャラリー

休館日 日曜日(休日の場合は翌平日)  
観覧料 一般310円、団体250円(一般の方は9月30日まで300円でご利用いただけます)  
施設内以下無料、障がい者手帳をお持ちの方及び付き添い1名無料  
主 幹 多治見市モザイクタイルミュージアム  
企画 村山 閑(館長室)

モザイクタイルミュージアム  
TEL 0572-43-5101 FAX 0572-43-5114

受贈記念小企画展  
**今井兼次 不死鳥のモザイク**  
細部に宿る、造形の魂



日本に欧米の芸術家、特にアントニオ・ガウディを紹介したことで知られる今井兼次(1895～1987)は、情熱を注いで創作に没頭し、建築家でも、僧侶でも、作家でも、作品を残しています。作品の数は決して多くありませんが、一部の作品は、その魅力にひかれた人々が継承し、継ぎ、時には断片的に残して今に伝えています。

2018年度、モザイクタイルミュージアムは、大阪府上野市金澤より、日本町ビルディング屋上に施工されていた作品の断片を受贈いたしました。

これは、今井兼次が「フェニックス・モザイク」と呼ぶ手法によって制作した、高さ約1.2m、幅約1.8m、奥行きも2.5mを超える大作「糸車の幻想」の一部分に位置していた「鳳凰(のりめ)」の部分です。ビルの解体には、安藤忠雄の設計により大阪府工芸館木造ビルが新築され、最新技術を使用して「糸車の幻想」が再現されましたが、今井の手掛けた当初の部分として残されたのはこの「鳳凰」と、再制作のためのサンプルとして各所から取り外された断片(当館寄贈)を含め、ごくわずかなりでした。

本展は、この「糸車の幻想」に基づいた断片を中心に、今井兼次の作品の中から大分県豊後、東京女子学院大学の「フェニックス・モザイク」、名古屋市芸術センターにも残された断片、豊かな感性と合理性を併せ持つその魅力を伝えようとするものです。

関連企画

11月30日(土) 講演会「時間と空間を紡ぐこと」  
午後3時～ 講師 千葉 孝(筑波大学名誉教授) 会場 多治見市民会館 3F

12月15日(日) ワークショップ「名古屋テレビ塔をつくってみよう!」～モザイクコラボバージョン～  
午前10時～午後3時 講師 黒 隆雄/村山 閑 会場 多治見市民会館 3F 参加費 15 円

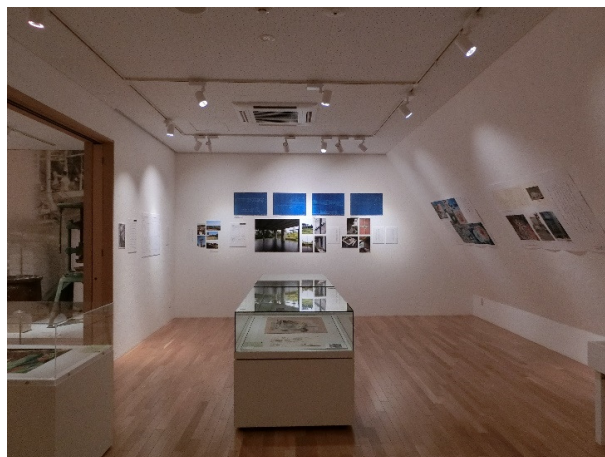
関連企画は申込みが必要です。更新情報、詳細はホームページをご覧ください。  
多治見市は組合せ、お申込み/申込先はモザイクタイルミュージアム  
問合せ/申込: TEL 0572-43-5101 FAX 0572-43-5114 e-mail info@mosaic-tile-museum.jp

モザイクタイルミュージアム  
TEL 0572-43-5101 FAX 0572-43-5114  
http://www.mosaic-tile-museum.jp



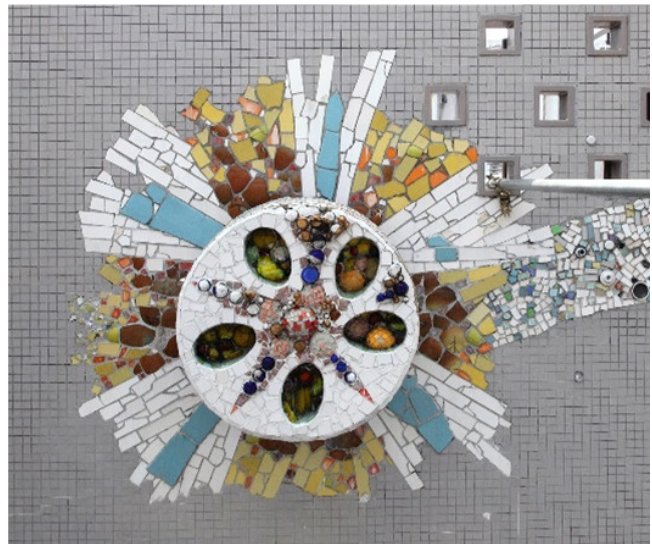
## 1. 本展を開催した理由

多治見市モザイクタイルミュージアムでは、3 階のギャラリーを主会場に、受贈記念小企画展「今井兼次 不死鳥のモザイク」と題する企画展を開催した。タイトルに受贈記念と冠したように、本展開催のきっかけは、今井兼次による巨大なフェニックス・モザイク「糸車の幻想」の一部分をご寄贈いただいたことにある。日建設計工務株式会社(後の株式会社日建設計)による旧東邦商事本町ビル屋上に、本作品が設置されたのは昭和 36 年(1961)。大阪経済の中心地に建てられた、当時の主力産業、繊維業の代表的な企業である東洋紡の関係会社のビルだった。



展示風景

屋上の「糸車の幻想」は、今井兼次がテナント入居者の憩いの場を演出するものとして、繊維産業の象徴に七夕の機織りをモチーフに、会社や地域の方々から思い出の詰まった茶碗、徳利などの器を譲っていただき制作したものだという(※1)。それから 50 年以上の時を経て旧本町ビルは解体が決まり、同所に新築される大阪商工信用金庫本店ビル設計を担当した安藤忠雄が、大阪の中心地を彩るシンボルとして作品の保存を提言した。当初はオリジナル部材の再利用も検討され、壁面から突出した 4 点のパーツが取り外されて保管されたが、劣化が激しく活用を断念したという(※2)。そのうちの 1 点である「織女星」が当館に寄贈されたのは、大阪歴史博物館学芸員だった酒井一光氏の導きによるものだった。当館の設立前のタイル資料



今井兼次

大阪・旧東邦商事本町ビル「糸車の幻想」 織女星部分拡大

収集活動の中で、東洋女子短期大学(現東洋学園大学)のフェニックス・モザイク断片が、文京ふるさと歴史館の計らいにより、笠原町の有志の元へ寄贈されていたことも、今回の受贈の道筋を作った。加えて「糸車の幻想」再現制作のために採取されていた壁面破片や食器等のサンプルも、当館がまとめてお預かりすることとなり、本展の開催につなげることができた。その報告の前に酒井氏の訃報に接したことは、まさに痛恨の極みであった。

## 2. フェニックス・モザイクと「窯元巡礼」

「フェニックス・モザイク」と称される今井の作品は、千葉・大多喜町庁舎、東京・旧東洋女子短期大学(現在の東洋学園大学)、大阪・旧東邦商事本町ビル、長崎・日本二十六聖人殉教記念館、東京・桃華楽堂の 5 件である。今井兼次の長男、兼介氏によれば、1930 年に建てられた東京・三宅雪嶺文庫の玄関に、雪嶺の息子の遺品である土器などを埋め込んだのが、ゆかりの人々の所持品などをオマージュとして建物に埋め込んだ事例の最初期と考えられる(※3)が、その後、同様の装飾技法はしばらく用いられなかった。いわゆる「フェニックス・モザイク」は、今井が 63~71 歳の短期間に重なり合うように手掛けられている。1958 年 6 月下旬に大多喜町役場が着工、同年 8 月には日本二十六聖人殉教記念館の設計依頼があつて、その竣工は 1962 年であった。旧東洋女子短期大学における陶片寄贈の呼びかけは 1960 年、旧本町ビル「糸車の幻想」の竣工が 1961 年である。そしてそれぞれの作品に対応するスケッチが複数枚遺されているが、いずれも豊かな色彩イメージが当初から念頭にあったことを思わせる。本展にご出品いただいたご遺族所蔵の資料の中には、記載された日付からみて施工作業中に記されたと考えられる「糸車の幻想」の部分スケッチがあり、「羽衣左端上部の像に濃いテッセラ」「淡色を自然にボカシ増大させること」など、現場にある素材を念頭に融通して施工できるような指示が書き込まれていた。今井がメガホンを片手にモザイク施工現場で指示を出していたことは、写真や本人のことはからもよく知られている。制作に取り組む時点で、膨大な量、しかも必要な色とボリュームを備えた陶片を用意する必要があつたはずだ。これだけの短期間にどのようにして集め、保管していたのだろうか。

大多喜町役場については地元の人々、東洋女子短期大学については在校生や卒業生、旧本町ビルについては社員や家族というように、関係する人々から不要な食器や火鉢などを集めたことは、今井自身が語っているし、東洋女子短期大学には募集用紙も残る。それが「フェニックス・モザイク」と名付けた所以で



もあった。一方、今井の遺した文章には、日本二十六聖人殉教記念館のために各所をめぐって陶片を集める様子が記されている。そこには常滑、瀬戸、織部、京都、高取焼、古唐津焼といった窯業地の名称の他、泰山タイル、中里(無庵)、白山陶器などの著名な作家や企業も登場する。十二代酒井田柿右衛門について触れる部分では「先年伺った気安いところ」という記述があり(※4)、これが初めての「巡礼」ではないことをうかがわせる。今回、こうした陶片の収集過程を想像させる手掛かりを、「糸車の幻想」から採取されたサンプルに見出すことができた。

### 3. サンプルの調査について

これらの総数約 1,200 点に及ぶサンプルは、大阪商工信用金庫からの寄託を受け、採取された状態のまま当館が保管することとなった。それぞれのサンプルには、再現工事を担った株式会社竹中工務店によるグリッド線の配列によって元の位置が分かるようにアルファベットと数字が書き込まれ、コンクリートがついた塊から、数センチの破片まで様々な状態で保管されている。調べたところ、小口タイルやボーダータイル、湿式成形と思われる大型タイル等の他、食器や火鉢、本作品のために成形されたことを思わせるようなガラスのパーツなども含まれていた。さらに京都・泰山製陶所の「泰」の刻印が押されたタイル片や、長崎・白山陶器のマークが入った箸置きと小皿、瀬戸の窯元国助陶器の裏印「国助」が入った小鉢等を見出すことができた。先に触れたように、今井の「窯元巡礼」の訪問先に「泰山タイル」と「白山陶器」、「瀬戸」の記述があり、食器は譲られたものという可能性も残されるものの、少なくとも泰山製陶を訪ねてタイルを入手していたことが、実物によって裏付けられたといえよう。また、「川惣」のマークと「1960」の数字が染付で表された磁器片は、川惣製陶所(明治時代、川本惣吉創業の瀬戸の窯元、現カワソーテクセル株式会社)による碍子の破片であり、数字は製造年を示していることが分かった(※5)。「糸車の幻想」完成の前年であり、比較的新しい碍子を手に入っていたこと、そして間際まで部材を集めていたことが感じられる資料である。



川惣の硝子

「糸車の幻想」から取り外された断片より

その他、九谷の色絵瓢徳利、美濃らしい染付の酒杯等の食器類、そして火鉢と思われるふっくらと厚みのある陶片が多数見受けられた。火鉢については今井自身のことばで、「火鉢の断片を使うことによって、フェニックス・モザイクが海外のものでは味わえない独特の肌合いと色感とを示してくれることを知った」(※6)とあり、意識的に使用してきたことが分かる。タイルについては、小口タイル、ボーダータイルなどの既製品らしきタイルから、厚みのある湿式成形の大型タイル(※7)まで多様な種類が使用されている。多治見で製造されたような施釉磁器モザイクタイルも含まれている。これまでの今井兼次の研究は、建築作品をめぐる議論の他、主に今井自身のことばやスケッチなどに基づいて進められてきたが、今回のような陶片などの調査は、そこに新たな視点をもたらすものとなると考える。

「糸車の幻想」は 2017 年、同所に新築された大阪商工信用金庫本店ビルの 2 階屋上に、株式会社竹中工務店によって再制作された。解体前に 3D スキャンをして、部材となるタイルや食器を方々から集め、躯体に罫書きをして貼り付けていくという徹底的な再現であった。部材となった食器の多くは多治見で集められたと聞く。そして工事を指揮した竹中工務店の轟木所長は次のように述べている。「一般的なタイル張りとは全く違う。下地の起伏は複雑で激しく、貼り方もフラットではなくてあえてガタガタにしたり跳ねるように

してみたりと、クラッシュタイルのレイアウト、目地巾も忠実に再現し試行錯誤の連続だった」(※8)。この言葉もまた、今井の製作工程の一面を伝えてくれるものだ。東京では東洋学園大学フェニックス・モザイクの壁面が生かされ、千葉では大多喜町役場が改修され活用されている。今井兼次の建築にかけた思いは、今も多くの人の心を動かしている。

- ※1 今井兼介氏からのご教示による。
- ※2 株式会社竹中工務店の資料による。
- ※3 三宅雪嶺の孫、三宅立雄氏からもご教示いただいた。
- ※4 「長崎だより—日本二十六聖人殉教記念建築現場の寸描」『建築文化』1962 年 3 月号(『今井兼次 建築創作論』所載、2009 年、鹿島出版会)
- ※5 カワソーテクセル株式会社からのご教示による。
- ※6 「秘話随想—長崎・日本二十六聖人記念館の建設」『早稲田学報』1963 年 1 月号
- ※7 湿式成形の厚手のタイルについては、まだ確実ではないものの滋賀県・近江化学陶器株式会社の製品の可能性がある。同社は、火鉢の生産から 1959 年頃にタイル製造へ転換しており、後の今井兼次の作品、日本二十六聖人殉教記念館や桃華楽堂にタイルを収めたと記録されていること、そして旧本町ビルのタイル片に滋賀会館のボーダータイルを思わせる製品が含まれていること等が、その証左といえよう。
- ※8 『日刊建設通信新聞』2017 年 10 月 30 日付掲載「大阪商工信用金庫新本店ビル」より